

果樹園管理

常緑



果樹

5→6月

JA香川県
西部果樹振興センター

山下 将和



●カンキツ

①今年産について

温州みかんの昨年の生産量は、一次生理落果が多かったものの、二次落果が極端に少なく推移し、かつ夏・秋の多雨による果実肥大もあって、当初の予想に比べて収量は多くになりました。したがって、今年産はいずれの品種ともやや不作傾向であると予想されます。中晩柑の昨年産は平年並みからやや少なめでありましたが、今年産は平年からやや多いのではないかと予想されます。これを踏まえると、温州みかんはどれだけ今年産の数量を確保するか。中晩柑は摘果等の作業を行い、基本大玉生産で、毎年成らす数量に整えるということになります。

また、4月は天候不順で雨も多

かったですが、仮に5月以降少雨の状態が続くようであると、緑化・発根が遅れて、生理落果が増える原因となります。春肥の吸収促進の為に小雨状態だった場合は、十分量の灌水および窒素中心の葉面散布を行うてください。

(1) 不作樹の管理

生理落果の多かった樹ならびに、落葉の多い樹は、花が少なく新梢が発生します。

着花確認後に立枝や太い果梗枝（成りカス枝）中心に弱剪定を行います。果梗枝や垂主枝、側枝から発生した強く長い春枝や遅伸びの春枝は芽かぎをするか、基部から剪除します。開花期に自己摘心出来ない枝も、芽かぎ等で取り除きます。

また、緑化促進のため、4月中旬から5月中旬に尿素やマグネシウムの散布を行ったり、この時期に降雨が足

りなかった場合は、灌水を行います。落果防止対策として、芽かき・摘芯と併用で、開花期（特に満開から3日後）から10日後に、GA100（200倍（25〜50ppm））を散布することも効果的です。

(2) 豊作樹の管理

着花の多い樹は、新梢の発生を促し樹勢維持するために予備枝を作ります。新梢が少ない樹は、隔年結果防止のため、5月下旬までは鉛筆大程度の太さで白筋の入った2〜3年生の横から斜め上向きの枝の小枝を対象に坊主にし、芽を発生させます。予備枝に花が着いた場合、再度新梢を残し、花だけ取りまします。

その後の対策として6月中旬頃までは枝の直径2cm〜3cm単位を枝別全摘果して隔年結果防止対策を行います。7月上旬に実施する場合は直径3cm以上の太さの枝を全摘果して休ませます。程度は樹全体の3分の1程度実施します。発生した新芽はハモグリガの被害を受けるので防除を徹底します。また、子房の充実や緑化促進を図るため、尿素の500倍程度やメリット青300倍、ジャップル1号300倍等いずれかを1週間おきに3回程度、定期的に葉面散布をします。全摘果した枝から夏芽が発生する場合は品質が

悪くなりますので、全摘果する枝の本数を3分の1程度に加減します。

②花肥の施用

花が多い樹では、5月上旬に花肥とし化成肥料で窒素成分5kg程度を施用してください。

③夏肥の施用

着果の多いみかん樹と中晩柑を対象に施用します。中晩柑では6月上旬に窒素成分で8kg程度を施用します。早生温州みかん・普通温州みかんは、5月下旬から6月上旬に果実肥大や発根促進のために年間窒素量の15〜20%を施用します。

貯蔵用普通温州みかんは、6月下旬に年間窒素量の20〜25%を施用します。

不作樹では果皮が荒くなったり、着色が悪くなることから夏肥の施用は止めておきます。

このように夏肥を施用することで、隔年結果の防止になったり、貯蔵力のある果実に仕上がります。中晩柑では果実肥大が良好になります。

特に、近年では、マルチ栽培や完熟、袋掛け栽培など樹体に負担をかける栽培が多いので、このような園では、遅れないよう施用を心掛けて下さい。

④摘果

二次落果が終わる頃の6月下旬頃

表1 全摘果(枝別含む)を目的としたフィガロン乳剤の使用法

	使用時期	薬剤と濃度
全摘果	生理落果最盛期 (満開10日~20日後)	フィガロン乳剤1,000倍 にエスレル10の2,000~ 3,000倍を混用すると効果 が安定します
	①枝別全摘果を目的とする場合には新梢の多い枝を選んで下さい。(樹の3分の1程度) ②落葉を助長するので、樹勢の弱い樹には散布しないで下さい。 ③気温が高くなることが予想される日に散布することが望ましいです。 ④散布後は、6月中に補正摘果(残果の全摘果)を行って下さい。	

から7月上旬にかけて、中晩柑および着果の多い極早生みかんから順番に、早期摘果を行います。
不作樹や高糖系温州みかんは後期重点摘果(8月以降)で対応します。
(1) 薬剤を利用した摘果等について
摘果の省力化を図るために着果の多い樹では、薬剤による摘果方法があります。その場合、ターム水溶剤(ナフタレン酢酸)や、フィガロン乳剤を使用した枝別または樹別交互結実を実施します。(表1・2)

枝別全摘果は、新梢の発生した側

表2 ターム水溶剤の使用法

温州みかんへとかんきつのターム水溶剤(ナフタレン酢酸)の使い方									
適用作物名	使用目的	使用時期	使用回数	使用濃度	散布液量	使用方法	総使用回数	注意事項	
温州みかん	全摘果	一次生理落果発生期 (満開10~20日後)	1回	500~1,000倍	葉先から滴らない程度 (250~500 μ L/10a)	摘果したい部分に散布	4回以内 (生理落果発生期は1回以内、生理落果発生後は3回以内)	・散布直後の降雨は効果が減ずる原因となるので、天候を見極めてから散布する。 ・全摘果目的に使用する場合、第一次生理落果の直前から秋季までの時期を逃さないように散布する。 ・極端に樹勢の弱い樹では使用を避ける。	
	間引き摘果	二次生理落果発生期 (満開20~40日後)		1,000~1,500倍		立木全面散布			・新梢抑制前に散布すると効果が高い
	夏秋梢伸長抑制	新梢萌芽前 但し、収穫前日まで	2~3回	1,000~2,000倍					
かんきつ	摘果	生理落果発生期(満開10~20日後)	1回	1,000倍	250L~500L/10a	摘果したい部分に散布	3回以内(果実肥大期は2回以内)	・散布直後の降雨は効果が減ずる原因となるので、天候を見極めてから散布する。 ・全摘果目的に使用する場合、第一次生理落果の直前から秋季までの時期を逃さないように散布する。 ・極端に樹勢の弱い樹では使用を避ける。 ・新梢抑制前に散布すると効果が高い	
	夏秋梢伸長抑制	新梢萌芽時及び再萌芽時 但し、収穫前日まで	2~3回	1,000~2,000倍		立木全面散布			
	果実肥大促進	果実肥大期 但し、収穫前日まで	2回	4,000~8,000倍		又は枝別散布			
	後期落果防止	果実着色期~ 収穫予定14日前	1~2回	1,000倍					

枝(もしくは亜主枝)単位に樹全体の3分の1程度を選んで薬剤散布をします。また樹別交互結実は、樹全体を全摘果するものですが、管理の面から園地単位で行うのが得策です。使い方については、最寄りのJ Aや普及センターにご相談ください。なお、気温が25℃以上になると摘果剤の効果が高くなり落果しやすくなります。

このために、全摘果、部分摘果ともに、気温が25℃以上の時期に実施しないと、思ったとおりの摘果にならない場合があります。

薬剤だけでは完全に落果しないので、6月下旬まで補正摘果を実施します。

5 マルチの準備

温州みかんの高品質化のために実施するマルチ栽培は、夏場の過酷な暑さの中で被覆作業を行うため、早めに準備をします。

巻き上げ式の簡易マルチング資材がある園では、今のうちから設置し、巻き上げて準備をしておきます。

6 苗木の管理

かんきつの苗木は、十分な管理をしないと大きくなるのに時間を要するので、未収益期間が長くなるだけでなく、期待した収益を得るのにも思わぬ期間を要することとなる場合があります。3月末に植えた苗木

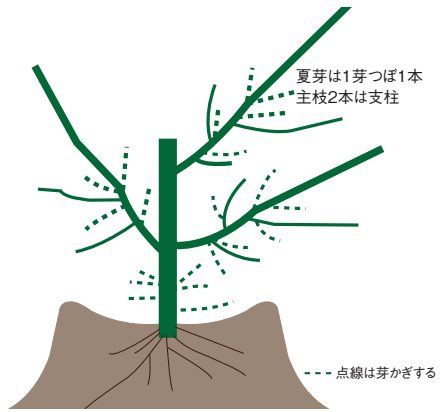


図1 苗木の管理

木は、4月下旬には発芽してきますが、図1のように接木部から上部15cmは全て芽かぎするとともに、その上部は、一芽一新梢に内向きを芽かぎし、強い春芽にします。特に不知火などの中晩柑は、一芽から三新梢ほど発生する場合がありますので、必ず芽かぎを実施します。5月は乾燥しやすいので30℃以上の高温が3日程度続いたら早めに灌水します。肥料は切らさないように一樹当たり油粕ならは5月と6月に500gずつ、配合肥料であれば月々100g程度施します。

●ビワ

1 適期収穫

ビワの収穫適期は短く、早すぎる

と酸味が残り、遅すぎると果梗がとれ傷みやよくなります。茂木では、9分着色程度で収穫できますが、田中は早く収穫すると酸が高いので、完熟果を収穫することが重要です。びわは、受光条件等で成熟期が異なりますので、園地の立地条件はもちろん同じ樹でも、樹の上部より下部や内部、南側より北側、中心枝より副梢に着果した果実の成熟が遅れます。また、果実の収穫は早朝の果実温の低い時に行って、日陰の涼しいところに置き荷造りは傷まないように丁寧にを行います。なお収穫は、がんしゅ病予防のため、必ず鋏を使用します。

2 夏肥の施用

収穫直前には、年間窒素施用量の30%程度を速効性肥料で施用して、樹勢の回復と夏枝の充実による花芽分化促進を図ります。なお、施肥が早すぎると、窒素の遅効きにより、果肉が硬くなり、へそ青症が発生することがありますので注意します。

3 剪定・芽かぎ

収穫後、果痕枝から発生した新梢は充実したものを一本残し、他は除去して下さい。また未着果枝から発生する新梢(副梢)は二本となるように芽かぎをします。この際、がんしゅ病予防のため、必ず鋏を使用します。

果樹園管理

落葉

果樹

5 ▶ 6月



J/A香川県
西部果樹振興センター

香川 忠義

●ブドウ

1 施設栽培ぶどう

加温栽培は7月の贈答用中心の販売となりますが個人消費を伸ばすためには大房とならないよう550g〜600gまでの房作りを目指し、1房の価格が高くないようにします。8月販売の無加温栽培も同様な大きさの房を作ります。1結果枝当たり1房を基本にピオーネでは大房、着果過多で着色不良、シャインマスカットでは着果過多で糖度不足とならないように注意します。

(1) **ピオーネ、シャインマスカット着房数**

着房は主枝1m当たり6房〜(7房) 10a当たり3000房

(2) **房管理、摘粒**

房の軸長は、ピオーネが5cmシャ

インマスカットは8cm程度に房作りを実施して大房とならないようにします。ピオーネ、シャインマスカットともに肩部分の支梗の粒数は5粒と多く残すようにして、肩が歯抜けにならないようにします。その下部は、出っ張りを取り果面の凹凸がないよ

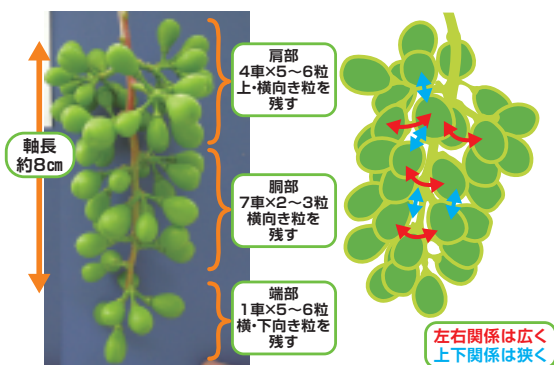


図1 シャインマスカット摘粒

うにします。シャインマスカットは内なりの未熟果になりそうなものを除去します。(図1)

(3) 枝管理(表1)

品種	新梢数	着房数	1房粒数
ピオーネ	10本/主枝1m	6	30~35粒
シャインマスカット	7~8本/主枝1m	6	40粒
ベリーA	10本/主枝1m	10	60~65粒
デラウェア	20~22本/坪	40~45房/坪	75~85粒
ロザリオ・ピアンコ	20~22本/坪	10~12房/坪	45~50粒
ネオマスト	15~18本/坪	15~18房/坪	60~70粒

副枝の処理は、房から先は1葉残し、房から基部は2葉残し摘心します。その後出る副梢はすべてとりまします。

満開30日から40日の硬核期に枝切、摘房など急激な樹勢変化が発生すると果実に生理障害の縮果症が発生し易くなりますので枝管理、房管理はそれまでにして置くか、満開40日以後の軟化期に入ってからします。

(1) 摘心

新梢を摘心することで花の充実を促し子房を大きくさせることで果実

肥大につながります。摘心方法は、10枚程度展葉した時期に房先7から8枚残し摘心します。

(2) 花穂整形

花穂整形は(3・4月号参照)、房の先端から8車程度とします。肩部分は3支梗が密となっているところを選びます。花穂先端を切ると支梗が伸びることから先を切るの、摘粒時期にします。方法は施設栽培と同様に整形します。

(3) ジベレリン等処理(表2)

品種	1回目処理(無種子化)		2回目(果粒肥大促進)	
	時期	濃度	時期	濃度
ピオーネ(1回処理)	満開3~5日後	25+フルメット10	—	—
ピオーネ(2回処理)	満開~3日後	12.5~25+フルメット2~5	満開10~15日後	25
シャインマスカット	満開~3日後	25+フルメット5	満開10~15日後	25
ベリーA(子房咲)	満開予定約15日前	100+ビーエー液剤300	満開予定10後	100+フルメット5
デラウェア		100+(フルメット1とストマイ液剤1,000倍は使い分ける。)	満開予定10後	100
ロザリオ・ピアンコ	—	—	満開10~15日後	12.5~25

完全無核果とするためにピオーネ1回処理とシャインマスカットは満開予定の2週間前から開花始期にかけてアグレプト液剤1,000倍液の浸漬処理を施す。

① ピオーネは省力化を図り1回処理に切り替えます。

モモ

本年は開花直後に低温、曇天日射量不足に遭遇しています。着果状況を確認するため幼果を切断して黒くなっていないか確認してから摘果します。

1 摘果

摘果の前に摘蕾をしようと思いが、モモは急激に養分変化をす

表3 もも摘果の留意点

	回数	時期	方法
粗摘果	1回目	満開後20日~25日	目標着果数の2倍、上向き果、傷果
	2回目	1回目完了後	奇形果、双胚果、病虫害被害果
仕上げ摘果	3回目	満開後40日~50日	生理落果の少ない早生、白鳳
		満開後60日以後	生理落果が遅くまである白桃系
	4回目	見直し摘果	満開後50日~60日頃の硬核期前半の多量の摘果は生理落果た核割れにつながるので注意

ると、残された果実が変形果となったり核割れとなります。特に早生系のはなよめ、日川白鳳はなり易い品種です。数年前には梅雨に入っても、降雨がなく干ばつとなり、6月20日ごろ大雨となり、あかつきでも核割れが大発生となったこともありました。粗摘果では一気に落とさないようにするとともに急激な樹勢変化をさせないようにします。(表3)

2 摘果の方法

摘果程度は結果母枝の長さが長果枝30~50cmでは5~6果、中果枝10~30cmでは2~3果、短果枝10cm以下では3~4本で2~3果残します。残す果実は病害虫が少なく下向きで縫合線を挟んで左右が6対4程度に肥大している果実を残します。果実を残す葉果比は早生種で20枚に1果、中生種で25枚、晩生種で30枚とします。

3 新梢管理

若木など樹勢が強い樹では、徒長を防ぐ目的で、強い枝の先を軽く切るか捻枝をします。その後6月から7月上旬に発生する副梢には花芽が着生するので結果母枝に利用できません。過繁茂になった場合には基部から切り取ります。しかし、主枝には直射日光が当たらないようにします。

4 袋かけ

袋かけは生理落果の少ない品種を

満開50日ごろから始め、仕上げ摘果とかねて実施します。

5 除袋

除袋時期は、着色し易い日川白鳳では収穫始めの4～5日前、着色中程度の白鳳、あかつき、なつおとめは収穫始めの6～8日前、着色しにくい加納岩白桃、浅間白桃、清水白桃では収穫始めの8～12日前が目安です。この時期に、袋を取り地色が黄緑色からやや白くなってきた時期に除袋に取りります。反射マルチをしている場合にはそれぞれ2～3日早めます。除袋を実施する数日前に試し除袋をして着色の確認をします。

キウイフルーツ

1 新梢管理

新梢が強風の影響により枝折れを防ぐ目的で30cm程度伸びたら捻枝をしながら結束します。特に香緑は、折れ易いので早めから結束しておきます。新梢は強い枝で1m当たり20本程度とし多い場合は剪除します。

2 摘蕾(図2)

大玉生産を図る目的で不要な花は取りります。摘蕾の程度は1新梢当たり2～3個とし残す蕾の側果は不要であることから確認できるようになったら取りります。

3 授粉

キウイはかいよう病の関係で輸入花粉入手が毎年難しくなっています。このために、花粉採集用のマツアなど雄木のある方は花粉を採集して利用するとともに、来年用も兼ねて冷凍保存します。保存方法は、花粉を入れた容器と乾燥剤をひと袋(容器)に入れ、冷蔵庫の冷凍室で保管します。1～3年程度冷凍保存できますが2年以上経ったものは発芽率を確認してから使用します。発芽率により使用倍数を決めます。発芽率の高いものは液体授粉の場合500倍でも1果当たりの種子の数は変わりません。

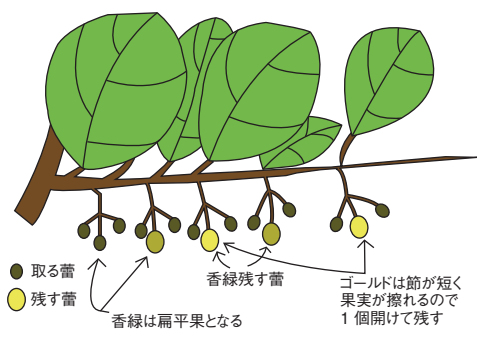


図2 キウイフルーツ摘蕾

雌花の受精能力は開花後3日程度です。受精能力は花弁が薄茶色程度まで能力があります。授粉作業は生育に早晚があることから2～3日置

きに実施して、1樹当たり3～4回掛かります。

4 袋掛け

降雨から軟腐病の発生を少なくしたり、日焼け、果皮障害を少なくするために早めにかけます。

力キ

1 摘蕾

大玉生産を目指すことから蕾の時期から取り掛かります。7月に大量の摘果をするとへた隙の原因にもな

ります。太秋、富有柿は1枝1～2蕾が基本ですが太秋の苗木など部分的に結実が少ない場合にはやや多く残します。

2 授粉

大宮など雄木を混植していない場合は石松子を用いて花粉を20～30倍にうすめて人口授粉をします。

3 液肥の葉面散布

5月上旬から中旬に尿素の500倍を葉面散布して果実の初期肥大を促進させます。